

Coterie magazine writer 'Sae Tamura' research notes : A writer, a wife, a ghostwriter, and a woman.

Tsukasa Izumi

Abstract

Writer Sae Tamura made her debut via the Literary Prize before World War II. After the war, she became a member of Dojinshi, a coterie magazine founded by her husband, writer Kenjiro Nagasaki. She later became a ghost writer for her husband, who had stopped writing. Under such circumstances, she could not write her own work and her output decreased drastically. Although it is said that Tamura became a ghost writer for her husband of her own free will, her distress is revealed through her essays and novels about being a wife, a mother, and a woman. After the death of her husband, Tamura started to write about her own life experiences, but her writing was not recognized by the members of the magazine. Eventually Tamura stopped writing and disappeared from the literary world. Tamura's experiences and circumstances drive me to question the issues within the Japanese literary and social environment.

同人作家・「田村さえ」研究ノート

—作家、妻、代作者、そして〈女性〉—

和 泉 司

はじめに

「田村さえ」とは何者か。

21世紀を十年以上経過した現在は言うに及ばず、20世紀末、いや、田村が作家としてその文章を発表していた20世紀半ばにおいても、その名を知る人は少なかったであろう。田村は週刊誌『サンデー毎日』が実施していたサンデー毎日大衆文芸募集の第26回（1940年）に小説「やけぼつくひ」が佳作11編の中に選ばれたことで、作家としての活動の契機を得た。そしてこの時、当選に選ばれた長崎謙二郎と知り合い、後に結婚したことが、田村の人生を決定づけた。戦前・戦後を通じて文芸同人誌運営と「文学活動」に没頭する長崎との結婚生活の中で、田村は五人の子供を産み（うち一人は生後間もなく死別）、その子育てと家事、それだけでなく生活費の金策に追われることになる。その後、さらに田村は長崎の代作も行うようになった。「田村さえ」の名前は長崎がかかわる同人誌に常に「作家」として連ねられていたが、しかし「田村さえ」名義で発表されたテキストは非常に限られている¹。長崎が1968年に死去すると、田村は長崎との記憶を描くことで、一時「作家」に立ち返るが、未完のままやがて消息を絶つ。1988年以降、2017年の現在まで、田村のその後はわかっていない。

本稿筆者は太平洋戦争の敗戦後から1950年代にかけての日本の文学運動および文学賞の展開を考える上で、「文壇」の表舞台に届くことがなかった「作家」たちの活動を追っている。それによって、1945年以降の日本の文学状況を多面的に把握することを意図しているからである。

¹ 戦後では、第3回読売新聞小説賞（1951年）の第一次予選通過作品12作に、田村さえ「六十日の人生」が入ったことが確認できる（読売新聞1951年10月1日朝刊紙面より）。このとき当選したのは、金川太郎「勝負師」。金川は第33回と第53回サンデー毎日大衆文芸入選。第38回、第54回直木賞候補。金川については、サイト「直木賞のすべて」<http://prizesworld.com/naoki/kogun/kogun38KT.htm>を参照した。

その構想の中で対象とした長崎謙二郎と彼が関わった文芸同人誌について調べる際に登場する「田村さえ」の文章に、本稿筆者はその意図とは別に、強く惹き付けられた。田村は、長崎の「黒子」として活動し、長崎を支え続けたことによって、同人誌の中で「評価」されていた。しかし、時折描かれた田村自身の文章の中には、長崎の〈妻〉であることの苦しみ、長崎家を支える〈母〉としての重圧、そしてその役割に納得しきれない・徹しきれない田村の内心の違和感がにじみ出ているように思えたからである。この〈作家〉が抱え、描こうとし、描ききれなかったものは、本稿筆者の研究計画や意図などをはるかに越えて、〈作家〉というあり方を考える上で重要なのではないか。そのように考え及んだのである。

〈作家〉であろうとすること、同じく〈作家〉であろうとした男の〈妻〉となったこと、やがてその男の「代作者」となったこと、そして、そのような境遇に陥ったのは、田村が〈女性〉だったからであること。

筆者が手に取った長崎のかかわった文芸同人誌には、長崎の没後、その破滅的な〈作家〉人生に対する賛否が繰り返し描かれた。いや、生前でも、長崎の活動あるいは「活動しないこと」——長崎は1950年代に入ると、文芸同人誌を運営しつつ、まともに小説テキストを描かなくなっていた——はしばしば他の同人作家たちから言及されていた。田村が1950年代以降、長崎の代作をしていたことは、同人の間では秘密ですらなかった²。しかし、それらは全て、「長崎謙二郎」への言及であり、「田村さえ」へのそれではなかったのである。

長崎の関与した文芸同人誌には、田村の他にも女性の同人作家が加わっていたし、そのテキストも何度も掲載されている。そうだとすると、雑誌は「男性作家」による運営であった。その中で、田村の何度か掲載されたテキストは、〈女性〉であることによる困難を常に訴えていた。しかし、その訴えは注目を集めることなく、田村は「長崎謙二郎の代作者」として「気の毒」に思われる存在に留まった。一方で、描かない長崎は、同人たちからは家族を犠牲にしても同人活動に没頭するほど「文学」に執着する人物と見なされ、ほとんどテキストを発表しなくなった晩年においても「描かない作家」と呼ばれていた——テキストを描いていなくとも「作家」と評されていたのである。つまり、ここにある、田村と長崎に対する行為と評価との間の不均衡は、この二人の参加していた同人誌共同体の中では「ない」ことにされていたのだ。

「田村さえ」に焦点を当てたのは、この不均衡が、いかに田村を苦しめたか、その苦しみを引き受け、想像していくことこそが、文学研究、さらには現代日本の社会・文化のあり様を捉えていく上で重要なことだと思いついたからである。その点で、本稿の執筆動機は、ひどく情緒的であることを認めなければならない。

「文壇」と「文学賞」は、その存在を「ない」ことにされた無数の「作家」たちの存在によっ

² 同人芸誌『碑』第18集（1968年9月）掲載の長崎略年譜には、1952年の項目に「田村が長崎の代作を本格的にはじめる」と記されている。また、長崎の死後に発表された竹森一男『鬼宴』（牧野出版社 1971年）は、竹森自身と長崎をモデルとした小説だが、その中で、長崎と思われる作家・如月が、妻・雪子に代作をさせていると自ら明かしている。

てその価値が裏打ちされているものである。そうである以上、その「ない」ことにされた「作家」たちによって「ない」ことにされた存在には、多重にその問題を負わされている。田村は、まさにそのような存在である。

田村が書いてきたテキストはそう多くはない。戦前にサンデー毎日大衆文芸の佳作となって以降、各種データベースで検索できる範囲では、「鳳仙花」（『文藝汎論』1941年10月号）、「琴」（『政界往来』1942年11月号）といった小説の存在が確認でき、戦後は後述のように、『文芸復興』（第2次。1955年から1962年まで所属）、『碑』（1962年から、正確な脱会時期は不明）で時折テキストを発表し、まとまった小説は『文芸復興』に掲載され、のち単行本『火の車』（朱雀社1958年）として出版されたものがある程度である³。そして、長崎の死後、小説「碑」を『碑』誌上で連載するが、第6回までで中断し、その続きを本稿筆者は発見できていない。

これらの小説が、実は非常に優れたテキストであり、しかしそれが「長崎謙二郎」の蔭に隠され、正当な評価をされてこなかった——というわけではない。田村の小説は、場面転換や時間軸の変化が唐突で、物語を追にくい部分が散見される。文章は平易だが、筋がよくわからなくなることもしばしばあり、展開も単調であることが多く、それほど完成度は高くない。戦前の『文藝汎論』や『政界往来』に掲載されたのは、おそらく長崎のコネクションの結果であり（長崎のテキストも両誌にしばしば掲載されていた）、戦後の『火の車』も巻末の「跋」は長崎が書いていて、そこで田村のテキストを絶賛しているあたり、田村が長崎の内縁の妻であることが当時すでに明白であったことを考えれば、苦笑を禁じ得ない。

本稿は、その意味で、「田村さえ」を文学史の表舞台に引き上げ、正当な評価を与える、ということを目ざしてはしていない。田村が、このような幾重にも「まともに評価され得ない」環境の中で、それでも書き続けたことの情動、それを見つめ直したいのである。そこに、〈文学〉を描く者、読む者、批評する者、分析する者を問い直す力があるのではないかと考えるからだ。「田村さえ」を読み、識ろうという行為は、〈文学〉〈社会〉〈性差〉といった様々な規範に、それを規範と気づけないまま従っている本稿筆者が、研究を大きく開いていく上で、さらには一個人として社会の中で生きていく上で、非常に意義があると感じとれたのである。

そして、今後の研究構想においても「田村さえ」の存在を追求することは非常に有効になるだろう。そこから、現代日本の社会、文壇のあり様をとらえ直すこともできるからである。しかし、まずは「田村さえ」を読むこと、識ることを優先事項としたい。そのためには、田村の小説テキストの分析を行うことになるが、本稿では、筆者の力量・準備不足もあり、そこまでは至らない。先行研究も全くない「田村さえ」と向き合うために、ここではまず、田村の経歴、そして同人誌内でどのように描き、どのように読まれたかといった、1950年代以降の田村の状況の把握を目的とする。

³ 他に「尼將軍政子」（『大衆』1955年10月号）の存在が確認できるが、本文未見。

1. 田村さえと長崎謙二郎

まず、田村さえ、およびその夫・長崎謙二郎の経歴の確認と、そのための資料を提示しておきたい。最も重要な資料は、長崎が人生最後の拠り所とした文芸同人誌『碑（いしぶみ）』（以後、『碑』と略称する）である。

『碑』は、1962年、長崎謙二郎が主宰者として立ち上げ、1968年に死去するまで、その運営を行っていた雑誌である。この文芸同人誌に、田村は創刊当時から「田村さえ」名義で同人となっている。長崎の略歴は、その追悼号となった『碑』第18集に掲載された「長崎謙二郎略年譜」にまとめられている。一方、田村の略歴は『碑』誌上に掲載されたことはない。田村は長崎死後の『碑』第20集（1969年10月）から、「碑」と題した小説の連載を開始し、長崎および『碑』の回想という体裁で、その中で自身のこれまでにについて言及している。田村のおよその略歴は、そこから推測できる⁴。

田村さえは1914年、東京の芝、白金に生まれた。当時、父親は貿易商をしており、第一次世界大戦の戦争景気で羽振りが良かったと述べている。その後田村の父が公務員に復帰し（つまり貿易商となる以前は公務員であったようである）、その後東京市場協会に天下りして、さらにはそこを辞めて、田村が女学校に入学するころは八幡製鉄に転職していた。この時期、田村は北九州市に住んでいたという。1933年、田村は再び家族で上京していたようである。その後、医学生と婚約をするが死別。26歳、1940年にサンデー毎日大衆文芸の募集に小説を投稿し、先述の通り、それが佳作11編の一つに選ばれた⁵。

この佳作に選ばれた後、サンデー毎日大衆文芸の当選者（佳作も含むようである）として、田村は長崎謙二郎と知り合った。長崎はこのとき、筆名・草薙一雄名義で投稿した「足柄峠」が入選となり、『サンデー毎日』1940年第19号（4月14日号）に全文掲載されていた。長崎は田村宛に「あなたの小説は大衆文学ではなく純文学で発表舞台に当を得ていたら芥川賞も夢ではなかったろう。自分は仲間と同人雑誌を出しているが、ともに勉強する気はないか」という手紙を送り、同人に勧誘したのだった。当時長崎は結婚しており、長男も生まれていた。この長崎の家に出入りしている間に関係を持つようになり、1941年に長崎は妻と別居し、田村と内縁関係となった⁶。同年、同人誌『鷺』に発表した小説「峠の家」が第14回（1941年下半年期）芥川賞の一次候補に推薦され、宇野浩二が選評の中で名前を挙げている。しかし、その評価は厳しいものであった⁷。

⁴ 他に、田村前出『火の車』（朱雀社 1958年）巻末に描かれた著者紹介などから類推した。

⁵ このとき、田村さえが佳作に選ばれたことは田村本人が『碑』第18号の長崎追悼文（「夫・長崎謙二郎」）の中で言及しているが、佳作入選者の中に「田村さえ」という名前は無い。佳作に選ばれた中で「肥後きく子」のみが女性名であること、その住所が当時田村が住んでいたという東京市豊島区椎名町であることから、肥後が田村であると推測した。同様の推測は、すでに川口則弘氏によってもなされている。肥後名義の小説は、『サンデー毎日』の増刊号に所収される予定、と発表時に告知されているが、増刊号については本稿執筆段階では未確認である。

⁶ 長崎の先妻は、自分の母親が生きている間は籍を抜かないことを条件に長崎との別居を承諾したという。しかし、先妻母の死後も籍は抜かれず、最終的に長崎が法的に先妻と離婚し、田村と入籍したのは1963年頃であったらしい。田村「ある結婚残酷物語」（『碑』第3号）を参照。

⁷ 「峠の家」が第14回芥川賞一次候補に入ったことについては、サイト「芥川賞のすべて・のようなもの」（<http://>

翌年、田村は第一子を出産。1944年には長野県上田市に疎開し、そこで日本の敗戦を迎えた。戦後間もなく、第三子となる男児を出産するが、当時長崎は病床にあり、田村が日雇いの労働や長崎の未回収の原稿料・印税の集金などに追われる中で男児は死亡する。一方、戦前戦後を通じて、長崎は邦枝完二の代作を行っていたが、1952年頃から、その長崎の代作を田村が行うようになる。1954年に長崎は邦枝と絶縁するが、同時期、長崎名義で発表された複数の時代小説⁸は田村の手によるものだという⁹。

戦後、1955年創刊の文芸同人誌『文芸復興』に田村と長崎は共に参加した。田村はここで連載を持ち、それが単行本『火の車』として1958年に朱雀社から出版されている。この中で、田村は終戦直後、自身が生まれたばかりの男児を置いて日本各地を金策のため駆け回っていたことと、自らの想定外の妊娠・出産についてを描いていた。

田村は長崎の代作者として大衆時代小説を手がけていたと思われるが、そのような娯楽小説も50年代後半から60年代に入る頃には売れなくなっており、長崎の家計は破綻状態になっていた。1968年、長崎が胃がんのために死去すると、田村は『碑』誌上で長崎の回想の形式をとった小説「碑」の連載を開始する。しかし、第六回（『碑』第26号 1973年12月）まで発表したところで中断し、『碑』にその名が見られなくなる。その後、1976年9月発行の『碑』第29号の編集後記において、以下のような形で田村の消息が語られた。

（前略）もうひとりの病人田村さえは、実のところよく自身その消息を把握かねている。四十八年十二月に出た二十六集に連載の〈碑（六）〉を発表したとき、（中略）その後続篇の原稿催促を何回もするうち、神経が消耗してしばらく書けそうもない旨の連絡があった。病気なら止むを得ないので見舞や激励の手紙を書き、電話もしたのだがほとんど返事がなく、程経てから、手紙その他の連絡を一切してくれるな、電話のベルの音をきいただけでも神経が苛らだつありさまだから、こちらから連絡するまで放っておいて欲しい——その手紙があつてから今日まで連絡がきれている。同人の何人かが電話したが、電話口にかほそい声聞きこえたと思うと切れてしまったという。長崎謙二郎夫人としてよくなどより旧く、親しい

prizesworld.com/akutagawa/の「田村さえ」の項目で知ることができた。同サイトを運営している川口則弘氏には、他にも田村さえ、長崎謙二郎、『碑』について多くの情報をご提供いただいている。また、南弥太郎は長崎への追悼文の中で、「峠の家」を一次候補として推薦したのは、長崎だと述べている（南「露の世ながら、さりながら」『碑』第18号）。南によれば、長崎は「奥さんにしたい人」を芥川賞に推薦したということで周囲から「一種の物笑いにされた」という。ただし南自身は「そういう馬鹿さ加減こそ僕は買いたい」と擁護している。ここからは、当時の長崎が芥川賞の推薦者カードを送られる程度に、作家として認知されていたこともわかる。

⁸ うち、「千代田城炎上」（同光出版1955年）などは映画化もされている。

⁹ 落合茂は長崎への追悼文の中で、「恋小町」を皮切りに、「平手造酒」や「千代田城炎上」など、（出版社が—引用者注）つぶれるまでに六〜七冊出版した。ときどき、原稿にさえさんの筆跡がまじっていて、交代で書いているらしい模様がうかがえた（中略）「千代田城炎上」などは、さえさんの作品だとにらんでいた（中略）とことん二人三脚のカップルなのだろうと、ほくはほくなり理解していた」と述べており、落合が田村の代作を察していたことを示している。

友人もいるわけで、消息のわかる方は連絡いただきたい。話は逆だが、ぼくはどうしていいかわからないでいる。訪ねることは無理に押しかけることになり、その衝撃からどんな事態になるか、予測できないので未だにためらっている。

それからさらに後、『碑』第50号（1988年4月）の「物故同人特集」で、長崎謙二郎の記事（「夫唱婦随」）を担当した間太平は、同記事執筆のために田村と連絡をとったことに触れている。間はこちらで田村から受け取った手紙本文を引用しているが、そこには長崎の遺品に目を通そう、触れようとする苦痛を感じ、自分が心の病にあるのではないかと田村が考えていることが記されていた。田村の消息がわかるのは、この時までである。

その夫・長崎謙二郎については田村の略歴への補足という形にしておきたい。

長崎は1903年、京都に生まれた。小学校に進んだ後、1年あまりで退学し、家族が大阪へ転居した時期に、ガラス工場で働き始めた。このとき満9歳である。以後、職を転々とし、1921年に映画の活動弁士となった。略年譜によれば、長崎は「道頓堀の寵児」であったという。この時期に、映画関係者、脚本家、小説家多数と知己になっている。1923年、2度目の結婚。1925年、広島へ転居。1928年に長男が誕生した。1931年に文芸同人誌「新文学派」創刊。翌1932年に上京し、活動弁士をやめて文学活動に入った。1934年、第7回『改造』懸賞創作で投稿作「赤い風」が選外佳作となり、タイトルが掲載される。同時期、芹澤光治良の知遇を得ると、年に100日以上も芹沢邸を訪問し、そこでコーヒーを飲んでいくのが習慣のようになっていた。1941年、小説「為政者」が直木賞の予選候補となる。1943年には、「元治元年」が新潮賞（第二部）候補となった。しかしいずれも授賞はしていない。戦時中に長野県へ疎開し、そこで病床につく。1950年に上京。1955年に『文芸復興』の同人に参加し、自身の経験に基づく文学史である「文壇野史」を連載する。しかし、1962年に自ら主宰の同人誌『碑』を創刊すると、『文芸復興』を脱退。「文壇野史」の連載も途絶した。『碑』を自らの牙城としてライフワーク的作品を書くつもりだ、と長崎は主張していたが、実際には存命中の7年弱の間に、長崎が同誌で発表した小説は短編小説1作¹⁰のみであった¹¹。1968年6月14日、胃がんにより死去。1968年9月発行の『碑』第18号が長崎の追悼号となり、そこには遺稿となった自伝的小説の「風化の貌」が掲載されていたが、5頁弱のほんの短いものであった。長崎は、結局「描かない」あるいは「描けない」まま、しかし〈作家〉として、人生を終えたのであった。

そしてこの長崎の死が、田村さえを大きく揺さぶることになるのであった。

¹⁰ 「老春」『碑』第6号（1964年4月）。

¹¹ ただし、戦前からしばしば長崎のテキストが掲載されていた『政界往来』には、長崎の自伝的小説である「地下の風」（1963年7月～9月）、「青春の歴史」（1963年12月）、「信佳姐さん」（1966年6月）などを発表している。これらは自伝に近いので、田村の代作ではないと推測している。

2. 『碑』と田村さえ

先述の通り、田村さえは『碑』創刊当初からその同人に名を連ねている。創刊当時の同人メンバーは以下の21名である。

- 稲葉真吾 (1909～1991、第16回芥川賞候補)
鎌原正巳 (1905～1976、第31、32回芥川賞候補)
興梠忠夫 (1910～1992)
近藤弘文 (不明)
四宮学 (1911～2003、筆名・宮林太郎でも活動)
島征三 (1909～ 不明)
高木卓 (1907～1974、第3回芥川賞候補、第11回芥川賞辞退)
高梨浩 (不明)
多田文三 (1903～1978、詩人)
田村さえ (1914～ 不明、第26回サンデー毎日大衆文芸佳作)
妻木新平 (1905～1967、第19回芥川賞候補)
中村昌義 (1931～1985、第76、78、80回芥川賞候補、第30回芸術選奨文部大臣新人賞受賞)
長崎謙二郎 (1903～1968、第26回サンデー毎日大衆文芸入選、第6回新潮賞(第二部)候補)
永松定 (1904～1985、英文学者、同人誌『誌と真実』主宰)
橋爪健 (1900～1964、戦前から活動していた文芸評論家・作家)
細野孝二郎 (1901～1977、戦前はプロレタリア文学作家として活動)
藤井重夫 (1916～1979、第26回芥川賞候補、第53回直木賞受賞、第2号までで同人脱退)
藤野登久子 (1908～没年未確認、第二回中央公論新人賞佳作)
間宮茂輔 (1899～1975、第6回芥川賞候補、戦前はプロレタリア文学作家として活動)
八幡政男 (1925～2007)
野洲寛 (不明、第2集までで同人脱退)

以降、同人数は第2集・23名、第3集・23名、第4集・26名、第5集・25名…と多少の増減を見せて刊行が続いた。『碑』同人は、基本的に主宰者・長崎のコネクションから集まっており、『碑』創刊以前に長崎が参加していた『文芸復興』から共に移って来た者もいた¹²。田村もその一人である。そして、長崎の知人・友人という構成からわかるように、同人の多くはこの時期すでに五十歳前後の壮年であり、「作家」としての肩書きを戦前の文学業績によって示していた。そして、すでに新人ではなく経歴的には中堅の存在ではありながら、戦後にはあまり商業文芸誌に

¹² しかし、『碑』創刊は『文芸復興』と対立してのことではなく、両誌の同人は友好的な交流を続けていたようである。長崎の追悼号にも、『文芸復興』同人が複数追悼文を寄せている。

登場することのない人々でもあった。『碑』は長崎の主導によって運営されていたが、その死後も同人が雑誌運営継続に尽力し、途切れることなく発行されていく。2013年春に、『碑』は100号に達し、2016年11月現在、第107号が発行されている。しかし、この107号を最後に、『碑』は終刊となった¹³。

この『碑』において、長崎は小説はほとんど発表することがなかったが、毎号「編集のはじめに」を執筆し、たびたび「随筆評論」を寄せている。そしてその中で、「マスコミ」「商業誌」「ジャーナリズム」を非難し、「営利的」ではない『碑』の「純粹性」を誇示していたのだった。長崎の死まで、このような方向性は『碑』全体の雰囲気として共有されていた¹⁴。

一方、田村さえは長崎の生前（第17集まで）、『碑』に3回しか登場していない。第3集の随筆「ある結婚残酷物語」と、第12集の随筆「ただ茫々」、第13集の随筆「梅雨あけ」である。このうち、「ただ茫々」は第12集の目次に乗っておらず分量も非常に短い。おそらく初校ができた段階で見つかった空欄の埋め種記事と思われる。つまり、通常の記事として書かれたのは2回のみだったのである。

田村の登場がわずかに3回（実質2回）のみなのは、家事と金策に追われていたからであろう。『碑』第18集の長崎略年譜を見ると、『碑』創刊の年に、「経済的に破綻」と記されている。この略年譜も、その私事情についての詳細な記述から、田村が作成したと考えられるが、自ら主宰の同人誌を立ち上げた時点で、長崎の家計は行き詰まっていたのである。長崎名義（田村代作）の時代小説の単行本が出版されていたのは、確認できる限り1960年が最後であり¹⁵、以降はまとまった時代物の依頼もなくなっていただろう。長崎の家族は『碑』創刊後二度転居しているが家賃が払えなくなることと考えられ¹⁶、それでもほぼ無収入であったらう長崎は経済的に頼りならず、田村が働いていたのだと思われる。つまり、田村は作家・「田村さえ」として活動する時間を労働のためにほぼ失っていたのである。

¹³ 『碑』が2016年秋の第107号で終刊を迎えたことは、2016年現在の『碑』編集を担当されている永井孝史氏にご教示いただいた。

¹⁴ 故に、その雰囲気合わない同人は辞めていったようである。藤井重夫が創刊2号までで姿を消しているのも、そのような経緯があったと推察できる。

¹⁵ 田村が代作するようになってからのテキストと思われる時代小説の単行本は、判明している限り以下の22冊。
 『風流女剣法』（同光社1954）『喧嘩大名』（同光社1955）『平手造酒』（同光社1955）
 『千代田城炎上』（同光社1955）『恋小町』（同光社1955）『道鏡艶記』（妙義出版1956）
 『浪人天狗』（同光社1956）『平安情歌』（妙義出版1956）『剣の十字路』（同光社1956）
 『双ツ竜直参纏』（和同出版社1957）『夜ざくら浪人』（光風社1957）
 『江戸っ子芸者』（南旺社1958）『若様とんび』（和同出版社1958）『不能者』（朱雀社1958）
 『萩城太平記』（刀江書院1959）『花の旗本剣法』（同光社1959）
 『日本の開拓者たち』（刀江書院1959）『青空花頭巾』（同光社1959）
 『天保花剣士』（同星社出版1959）『花の浪人街道』（東京書房1959）
 『めおと天狗流』（同人社1960）『天晴れ鷲』（明文社1960）

¹⁶ 竹森前掲『鬼宴』の中で、如月（長崎がモデル）が家賃不払いで貸家を退去することになり、埼玉へ引っ越す場面が描かれている。長崎は実際に、死去する数ヶ月前に東久留米から埼玉県新座市に転居している。

それは、長崎生前の『碑』に掲載された2つの随筆からも感じ取られる。田村の随筆は、長崎の〈妻〉として、〈女性〉としての苦悩が常に反映されているからである。

『碑』第3集掲載の「ある結婚残酷物語」は、以下のような文章から始まる。

先日戸籍調整に必要な用紙を、私は町役場へ貰いにでかけた。

私の請求で上役のらしい奥のデスクへ立っていった戸籍係の窓口嬢は、かがみこんで用紙をかぞえながら「離婚と婚姻と出生届用紙ですね」と大声で、私の請求を確めた。瞬間私はしてやられたことを感じて苦が笑いました。

案の定、狭い部屋に机を並べて、昼食前の手持ぶさたをもてあましているようにみえた吏員たちが、私の方を見て、どっと一せいに笑った。私は吏員たちを非難するよりも、人生の首枷をこんな具合に請求されれば漫才的なおかしみがあるだろうし、これに一枚死亡届が加われば、人の一生は、はい、それまでよとくるんだと、ひとつごとのように考えていた。

この三枚の用紙のうち離婚届は主人と先妻のもので、婚姻届は主人と私のものである。出生届は終戦の混乱の中で、届は宙に迷い幽霊人口の一人になっている二男の、高校生のものであった。私はこんど二十余年ともに暮らしてきた主人と、改めて婚姻届をすることになった。届出の上では新婚で、人生の春に当るのかもしれないが、私にはそんな晴れがましはなく、四人の子供たちのために肩の荷をおろす気持ちになったほかは、一人相撲の拍子ぬけと、落莫の悲哀を感じるばかりである。

田村の略歴をまとめた際に触れたように、1941年頃に既婚者の長崎と内縁関係となった田村は、以降5人の子を産んでいたが、1963年頃まで長崎と法的な入籍をしていなかった。長崎が先妻（長崎にとっては二度目の妻であった）と離婚していなかったからである。この随筆は、長崎と先妻と田村とその子供たちの、結婚という制度によって振り回された経験を田村の視点からまとめたものであった。この中で、田村は戦後間もない時期から十年ほどの間、長崎と先妻との間に生まれた長崎にとっての長男が同居していたことも語っている。そして、先妻の強かさとし活に触れ、自分が長崎と先妻の関係を破壊したことを自責してきたことを後悔する。

田村は「私は女の盛りを自責にまみれて暮らした善良な自分に涙をこそ流せ、彼女のためには涙をながすまい。彼女にとって、それはとるに足らぬ感傷にすぎないであろうから。」と記してこの随筆を終えているが、これは先妻を批判しているというよりも、長崎の〈妻〉として、子供たちの〈母〉として過ごしてきた時間に対する哀惜の念であっただろう。田村は妊娠・出産が想定外であったこと、そして長崎との結婚生活が後悔の結果となっていることを自ら語っている¹⁷。

またこの傾向は、第13集の「梅雨あけ」でも同様であった。こちらは次のような文章で始まる。

¹⁷ 田村前掲『火の車』（朱雀社1958）収録の「出産」（初出未詳）も田村の自伝的小説だが、その中で主人公の小枝に、胎児への愛情を持たせる一方で「命をかけた、自分の芸術生活が、出生児のために中断されるということは、何か、耐え難い気がした。」と語らせている。

更年期が過ぎて私は生理的に女でなくなった。女でなくなったということが、こんなに爽快でからっとしたものだとは思ってもみぬことだった。振り返ってみると、女の生理の沼の中で私はまるで梅雨どきの孕みなめくじみたいに、ただ本能的に、もそもそ這いずり廻っていたような気がする。そこには本当の私というものが居なかったような気がする。生理の梅雨があげたとき、私は初めて一人前の人間として復活したような気がした。

田村はここで、生理が止まったことによって自分は一個の〈人間〉になった、と宣言しているに等しい。つまり、田村にとって、生理的に〈女〉であるうちは、長崎の家庭における〈妻〉であり〈母〉という役割にとらわれており、自身は〈人間〉ではなかったのである。実際には、生理が止まっても、田村に課せられた〈妻〉〈母〉の役割は終わらなかったのだが。

これらの随筆から感じ取れるのは、晩年の長崎に〈妻〉として従っていることが、田村にとって相当な心理的抑圧となっていたということである。田村は直接的に長崎を非難しないが、この二つの随筆からも、長崎の〈妻〉であることの苦しみが浮かび上がってくるのがわかる。

そして、長崎の死後、それがより明確に描かれるようになる。

田村は『碑』第18集の長崎謙二郎追悼号に、追悼文「夫・長崎謙二郎」を寄せた。

私たちの家庭は夫を中心に回転していた。夫はワンマンで、大きな顔をして家庭に君臨していた。それが忽然と逝ってしまったのである。私にはとてもあるべきこととは思えなかった。ベッドの傍に立ちつくし、人間とは別のものに変貌してゆく夫の顔を見つめながら、これまで思い及ばなかった人の命と営みのもろさ、はかなさを噛みしめねばならなかった。死のまぎわまで二十七年をともに過して、その時時の生活の橋を懸命に渡ってきたのに、ふり返ってみるとそれすらがまるで一場の夢か幻のように思えてくる。涙も忘れて私はそのむなしさに呆然とするよりほかなかった。むなしさの中で、私は反射的に考えていた。仕事の上で、また人として、夫はこの世に何を残していったのだろうか。(以降、傍線は引用者)

夫である長崎を失った喪失感を語る一方で、長崎と過ごした時間を「むなしさ」といい、そして長崎が「何を残していったのだろうか」——何も残していないのではないかと訴えるこの文章は、長崎と家族を支えることに時間を費やしてきた田村にしか言えない重みがある。この追悼文は、ここから長崎との出会いと内縁状態になるところまでを語って、最後は「(未完)」となっている。追悼文として書かれながら、この文章は連載を意図していたのだ。つまり、ここで田村は「長崎」を語ることで、〈作家〉としての自分を復活させようとしていたのである。

しかし、続く『碑』第19集(1969年4月)には、「夫・長崎謙二郎」の続篇ではなく、随筆「万骨枯れて」が掲載される。

去年の暮れ俵がオルガンを買ってくれた。そういう環境に育ったためか、長崎と一緒にいるからの楽器のない生活は、口にこそ出したことはないが、心まで灰色に染まってしまいそ

うで侘しい限りだった。(中略) 近所のラジオやステレオが高音をたてていると、うるさい、仕事の邪魔になるとっては、独得の肚にずしりとこたえる舞台声で、あいてかまわず呶鳴りまくるありさまだったから、自分の家で楽器を買うなんてとんでもないことだった。長崎の癩癩の強さは凄じいもので、(中略) 殴られたら文字どおり殴り飛ばされることになった。

(中略) そんな長崎が亡くなってしまうと、私は反動的に楽器がほしい、オルガンがほしいと口にするようになった。

実際には、長崎は結婚後は暴力を振るうことはなく、暴力を抑制した結果怒鳴り声になって現れるのだ、と田村は書いているが、長崎が家庭内に君臨していたことが伝わる書き方である。そして、息子がオルガンを買ってくれたとき、田村は「長崎の存命中は妻、母、主婦のつとめを果す為献身一途の与える生活を余儀なくされていたから、二万幾千円という、それも二十歳そこそこの俸から贈りものをうけ、はじめての晴れがましい経験に動揺して」しまう。そのオルガンをなかなかうまく弾けないながらも演奏しているうちに、「教室の窓から夕日に輝く不知火の海を眺めた古墳の丘の小学校や、紫の矢車の花が春風にゆらいでいた女学校の校庭や、市場の往復に毎日買物籠を提て歩いた青春の頃の目白の屋敷町の甘い沈丁の花の香と、どこからか微風によって流れてくるオルガンの音色など」を思い起こしていく。そして、

私はその頃の幸福な生活と長崎と一緒にあってからの漫画を思わせる生活を比較し、その落差、変転の激しさをとおしてやはり長崎と一緒にになったことは間違っていた、なにを好んでみずから苦を求めることがあったろう、これまでの三十幾年の人生は悔恨の二字の意味を思い知るためにだけあったのではないかと考えて涙にくれるのである。

と、オルガンを得ての喜びと幸福感が、やがて長崎への恨みの反芻に結びついてしまう。田村はその直後の文で「冷静に判断して長崎は私にとって人間的にも過ぎたものであり、家庭に波風一つ立ったためしもない」と長崎を擁護するが、長崎の破滅的な生活ぶりを知る『碑』読者にとって、この擁護はあまり意味をなさなかったであろう。

それは田村自身もわかっていたのか、この随筆の中で、続けて田村は次のように言う。

この小文を目にされる方は、これこそ女の馬鹿さかげんの標本だと、嘲笑されることだろう。けれどもちょっと待っていただきたい。

ことは嘲笑ですむほど単純ではない。なぜならそれが男が女を理解できる限界を示すものだからである。生れながらに種の保存という大任を負わされている女性は、大任を遂行するために、本能、つまり母性の知恵として男には想像もつかない精神構造を与えられている。

ここから田村は、釈迦に始まる古今東西の哲人も、世間の男性作家たちがペンをふるって心理

の内奥に迫ろうともこの女の精神構造を理解できない、だから「永遠の女性などという理想像を拵えて、わき道へ逃げ」こんできたのだ、と喝破する。その上で、自らがこの女性の精神構造を切り分け、小説に書こうと宣言するのである。

前回にひきつづいて「夫・長崎謙二郎」を書くつもりでいたが、最近、私という女の心理の究明をぬきにして、夫を語ることはとてもできないと気がついた。

と、「万骨枯れて」において、長崎のことではなく自身の近況を語った理由も述べて、これから小説を書くことを表明したのだった。

しかし、田村のこのような決意、〈妻〉であり〈母〉あったことの苦悩は、『碑』の同人、読者にとって関心が低いことであった。同じ第19集の「編集のあとに」において、長崎から編集を受け継いだ稲葉真吾は次のように言う。

田村さえの「夫・長崎謙二郎」は好評だったので、続篇を書いてもらう予定だったけれど、長女の結婚など、夫亡きのちの家事の煩雑さに追われて果せなかった。しかしその真意は随筆で触れているように、女として、男としての謙二郎を追求したい女の執念みたいなものがあるのだろう。やがて彼女の作品として登場してくる日を期待していただきたい。

ここからわかるのは、稲葉（と、おそらくは『碑』同人、読者たち）は、「長崎謙二郎伝」を期待しているのであって、「田村さえ」のことに関心を持っていないということである。「夫・長崎謙二郎」と「万骨枯れて」、さかのぼって「ある結婚残酷物語」や「梅雨あけ」に描かれてきた、田村の〈妻〉であり〈母〉であったこと——〈女性〉であるが故の切実な告白には、価値を見いだそうとしていないのだ。『碑』において、「田村さえ」は、「長崎謙二郎」の付属物にすぎなかったのである。

おわりに

田村は、『碑』第20集から、いよいよ小説の連載を開始する。タイトルは「碑」。同人誌と同じタイトルを持ってきたところに、『碑』とは長崎謙二郎そのものであった、という意識を読み取ることは容易である。しかし、『碑』が長崎謙二郎そのものであったということ、それはつまり、「田村さえ」そのものであった、とも言えた。長崎は、自らのライフワークとしての大作発表の場として『碑』を創刊した。といいながら、結局、創刊後にほとんど小説を書くことはなかった。長崎は『碑』の編集に注力していたのだろうが、それができる環境、生活を支えたのは、田村であった。つまり『碑』を支えていたのは田村だったのである。しかし、それは同人にはまるで伝わっていなかった。『碑』は長崎のものであり、田村も長崎の一部としか見られていなかったのだった。

田村の小説「碑」は、そうした『碑』同人たちの先入観、田村の小説は同人たちの知らない「長崎謙二郎」を描いたものになるだろう、という願望をあっさりぶちこわす展開を見せる。小説「碑」

は、「長崎謙二郎」ではなく「田村さえ」のライフヒストリーを描き、さらに脈絡など関係なく、執筆時現在の田村の心境、感情が唐突に挿入され、かなり混乱をはらんだものになっていくのである。その意味で小説「碑」は非常に興味深い展開を始めるのだが、やはり『碑』同人には不評となる。『碑』第22集（1970年12月）は、本来ならば小説「碑」の第3回が掲載される予定であったが、載らなかった。その点について、稲葉は「編集のあとに」で次のように説明している。

田村さんは、読者からのいろいろな批判を受けとめた上で、構を新に苦慮苦斗、筆をすすめているわけだが、筆はいよいよ重く、この号の編集を終るときになっても予定の枚数に足りず、結局次号に期する以外に方法がないはめになってしまった。

小説「碑」は連載2回目までの段階で、内容についてかなりの批判を受けていたらしい。それは、強い執筆意欲を見せていた田村の筆を止めてしまうほどの圧力となっていた。それだけ、『碑』同人と読者は、田村の〈女性〉としての自己告白をいやがり、「長崎謙二郎」を書くことを求めたのであろう。

小説「碑」は第23集（1971年7月）から再開し、第26集（1973年12月）に第6回を掲載したところで、田村が執筆を止めてしまう。以降は、冒頭の略歴で述べたとおり、田村は『碑』との連絡を絶ち、消息がわからなくなってしまうのだった。

一方、長崎の友人であった竹森一男は、自身が属する文芸同人誌『文芸復興』の第41集（1969年4月）に、「鬼宴（おにのうたげ）」第一部を発表した。前述の通り、これは竹森と長崎をはじめとして、『碑』と『文芸復興』の同人をモデルとしており、いわゆる「戦前デビュー」世代の作家たちの現状を暴露する小説であった。そしてその焦点は、長崎をモデルとした如月健一郎の破綻した生活ぶり、竹森をモデルとした梶の生活の安定にこだわる姿を描くことにあった。

この「鬼宴」は、『碑』と『文芸復興』双方の同人、のみならず、同人外部においても注目を集めるだけの好評を得た。「長崎謙二郎」を「男性の友人作家」が描いたテキストは歓迎されたのである。この「鬼宴」は、書き下ろしの第二部、第三部が追加されて、1971年11月、牧野出版社より単行本として出版された。この「鬼宴」の中で、田村さえは「雪子夫人」として登場している。そこで雪子は、夫・如月に「純文学を書かせるために」自ら進んで「一切の代作を申し出た」「賢夫人」として描かれていた。

「鬼宴」第一部が発表されたのは、田村が「万骨枯れて」を発表したのと同時期であった。田村は竹森に、先に「長崎謙二郎」を描かれてしまったのである。そして、そこで描かれた「長崎謙二郎」は、仲間であった同人作家たちにとってわかりやすく、受容しやすいものであった。

この「鬼宴」の登場と好評とによって、田村が小説「碑」を書く圧力は否応なく強まったであろう。しかも竹森は、『鬼宴』の終盤で、雪子＝田村の、長崎と自らの人生を描こうという覚悟までも先に描いてしまった。如月＝長崎の葬儀の場面で、梶＝竹森は雪子と次のような会話を交わす。

「文学にはこりごりしましたわ」

雪子はいった。その声の陰影はとらえがたかったが、梶は素直に解釈して暗くうなずいた。雪子は夫から解放され、文学の迷妄から醒めたのであろうか。そうだ、文学なんか捨てたほうがいい。しかし、そのとき雪子の目の底から青い炎が吹き出すのを、梶はいぶかしく思った。急に表情がけわしくなり、挑みかかるような視線で梶をみすえると、「私は私をとりもどすのです」と、声だけは静かに低くいった。

「もちろんです」と、いささかたじたじとなつて、梶を目をしばたいた。

「私は私の文学をはじめののです。これから」

「え？——書くのですか」

「私のために鬼になるのです」

梶は意表を衝かれた。そこに貞淑と献身をふりすてて起つ一人の自由な女をみた、——というより、端倪をゆるさぬ雪子の心に動顛した。夫を葬うその日、しかばねをけちらすような反抗のまなじりで、文学の鬼になろうと宣言する妻。その爆発的な姿勢は、謎のような従順と献身の歴史がうそであったことをしめしたのか。過去の貞潔な顔の裏に、するどくけわしい鬼面をかくしていたのか、わからない。いずれにせよ、梶は文学にこりこりするどころではなく、これからはじめようとする雪子という文学の鬼女をながめていた。

「私を、あらためて『さむらい』の同人に加えてくださいまし」

「そ、そりゃ、奥さんなら無条件で……」

「私は夫のことを書きますわ。——残酷に」

この情景が、実際の葬儀で交わされた会話にどの程度近いのか、あるいは竹森による全くのフィクションなのか、それはもちろんわからない。まずは、田村＝雪子の覚悟を見抜き、それを描ききったこのテキストの表現を評価すべきだろう。

ただ、田村にとっては、このテキストのこの描写は、長崎を「残酷に」描くという意図を、自らが描き始める前に暴露されてしまったに等しいことであつたに違いない。

『鬼宴』の存在は、田村の小説「碑」の方向性にも影響を与えただろう。そして、小説「碑」を読む者たちも、多くは『鬼宴』を読んでいるはずであり、つまり田村は「長崎謙二郎」をどう書くか、に関心を偏らせていったはずである。そのように選択肢が狭められていく中で、小説「碑」はいかに書かれていったのか。小説「碑」が中絶し、事実上田村の最後のテキストとなつてしまったことを考え合わせると、小説「碑」は非常に重要なものとなる。この小説「碑」をはじめとして、田村の小説テキスト分析を進めることを、今後の優先課題としたい。

〔付記〕本稿は、科学研究費補助金（若手研究B）「戦後における〈文学賞〉の競合と社会的意義の拡大に関する研究—1950年代まで」の成果の一部である。

また本稿執筆にあたっては、直木賞研究家・川口則弘氏、文芸同人誌『碑』主宰の作家・永井孝史氏、駒澤大学准教授・倉田谷子氏にご協力・ご助言をいただいた。ここに感謝いたします。

